

大飯発電所3号機の 安全性に関する総合評価 (一次評価)について

平成 23年 10月31日
関西電力株式会社

福島第一原子力発電所事故から得られた知見

【地震による影響】

- 地震発生により原子炉は正常に自動停止
- 地すべりによる送電鉄塔の倒壊等により外部電源が喪失
- 非常用ディーゼル発電機は全て正常に自動起動
- 原子炉の冷却に必要な機器は正常に動作

【津波による影響】

- 非常用ディーゼル発電機、配電盤、バッテリー等の重要な設備が被水
- 海水ポンプが損壊し、最終ヒートシンクが喪失(原子炉冷却機能喪失)
- 全交流電源(外部電源+非常用ディーゼル発電機)が喪失

全交流電源喪失、最終ヒートシンク喪失が長期にわたり継続し、
燃料の重大な損傷、格納容器の破損など深刻な事態に陥った

【安全確保対策】

- 全交流電源喪失の対策
⇒プラント監視をする為に必要な電源設備を確保
- 最終ヒートシンクの喪失の対応
⇒蒸気発生器への給水設備を確保
- 重要機器の被水防止
⇒建屋の浸水対策を実施

電源確保
水源確保
浸水対策

安全確保対策

(加圧水型原子炉(PWR)の例)

浸水対策

扉のシール施工

①監視

バッテリー

中央
制御室



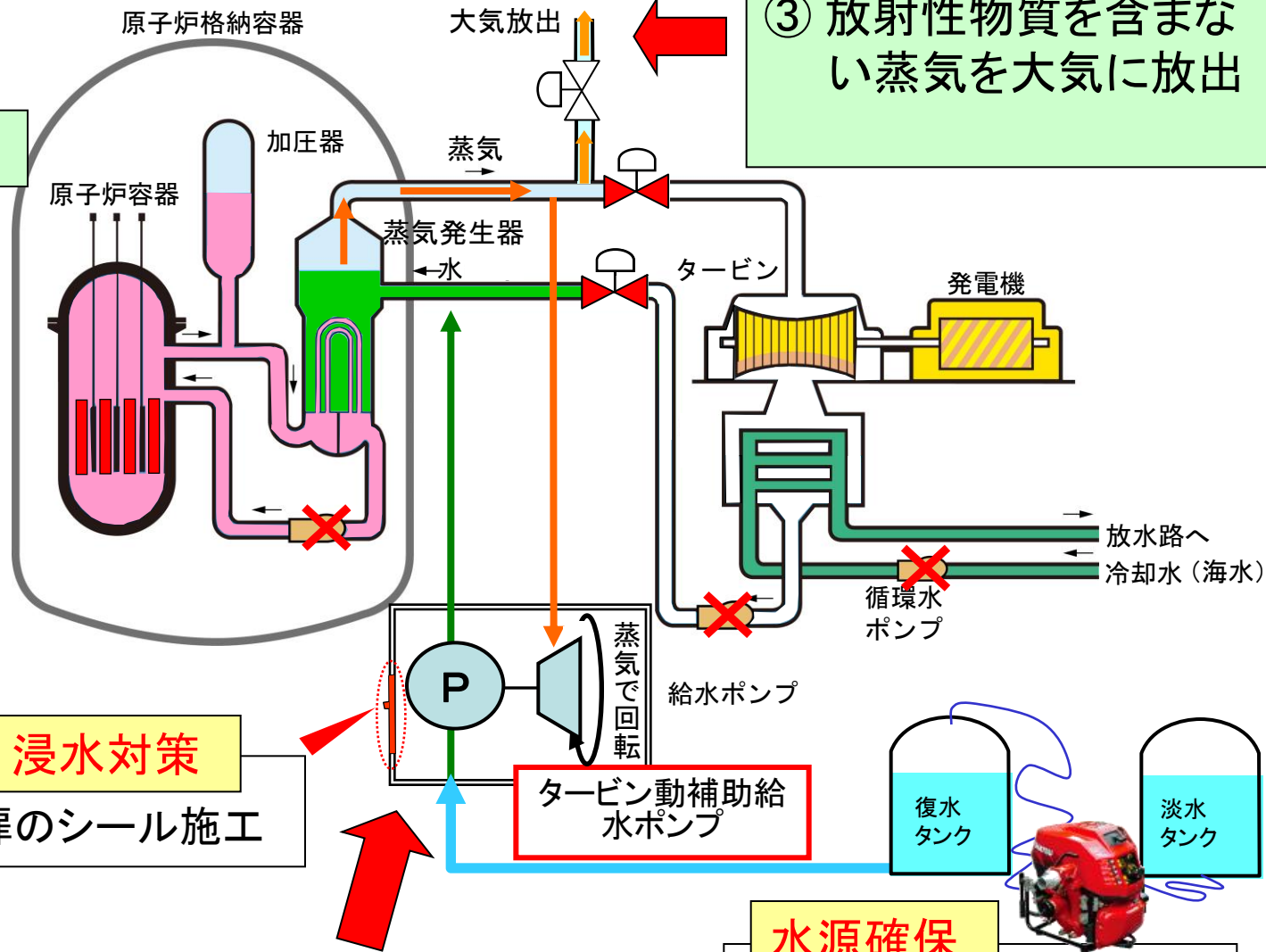
電源確保

空冷式非常用
発電装置等による
電源の確保

浸水対策

扉のシール施工

②蒸気で駆動する ポンプで給水



③ 放射性物質を含まない 蒸気を大気に出す

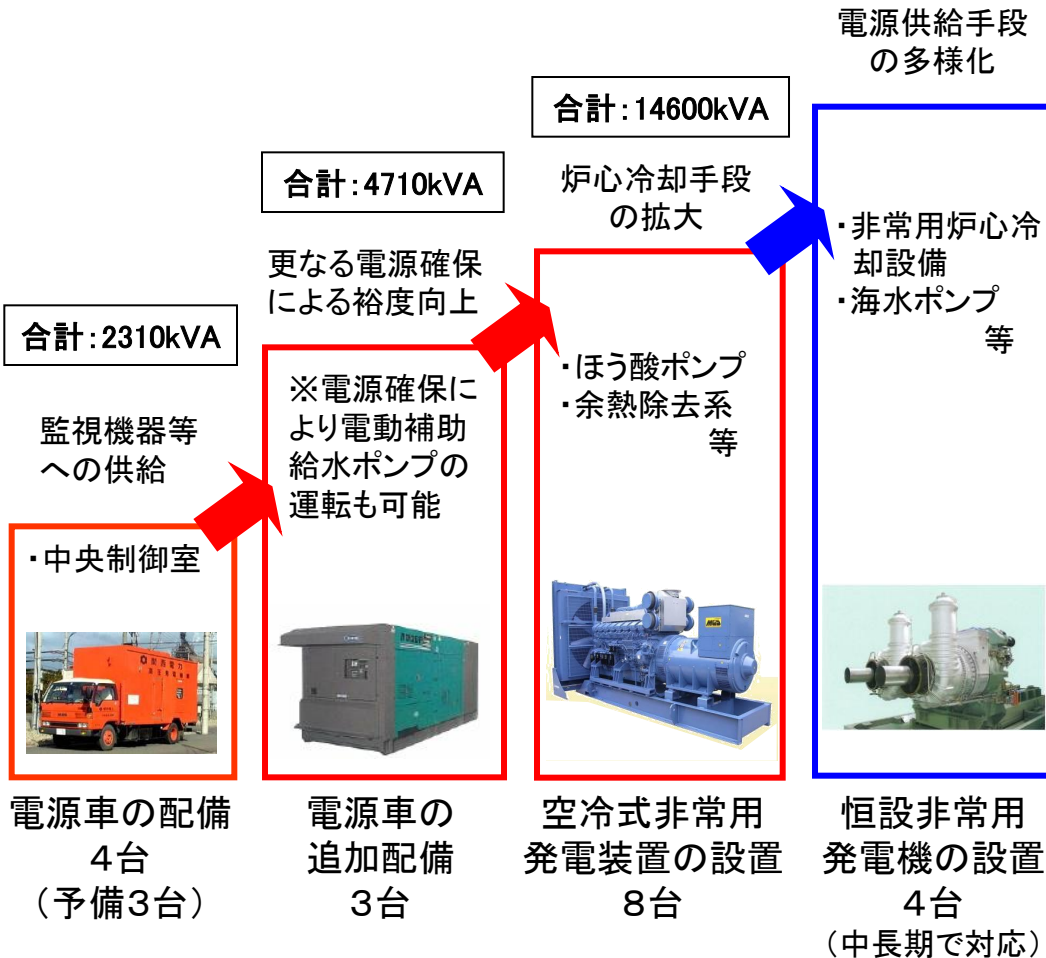
水源確保

消防ポンプ等による給
水の確保

電源確保への対応状況

3

ハード対策



○接続の簡易化

津波の影響がない**海拔30m以上**に配備した空冷式非常用発電装置から円滑に中央制御室や炉心冷却設備等に給電できるようにあらかじめケーブルを敷設

ソフト対策

配備した電源車や空冷式非常用発電装置をすみやかに必要な箇所に接続するための対策

○体制の確立

休日・夜間

常に6名確保

○マニュアルの整備

○訓練の実施

(訓練項目)

- ・電源車の配置
- ・電源ケーブル接続
- ・電源車の運転
- ・電源車への給油

平日訓練

14回

夜間訓練

3回

休日訓練

2回

これまでの実施回数



○訓練の反映

- ・夜間のヘッドランプの配備
- ・作業性向上のため接続端子形状の改善 他

○設備強化対策による接続時間の短縮

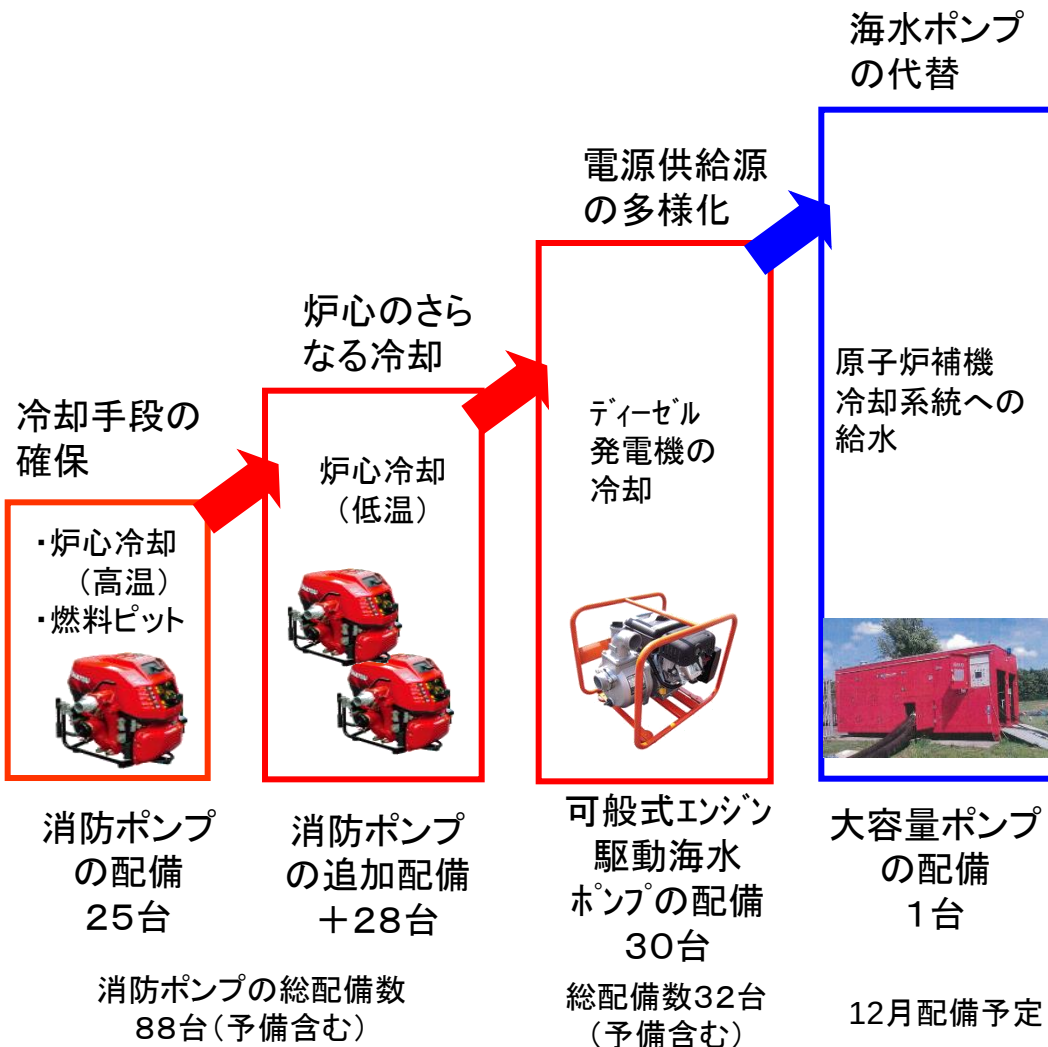
電源車: 135分 ⇒ 空冷式非常用発電装置: 78分
(全号機への給電が完了するまでの訓練実績)

水源確保への対応状況

4

ハード対策

冷却水の供給能力



ソフト対策

配備した消防ポンプ等をすみやかに必要な箇所に敷設するための対策

○体制の確立

○マニュアルの整備

○訓練の実施

（訓練項目）

- ・ポンプの配置
- ・ホースの敷設
- ・ポンプの運転
- ・ポンプへの給油

SG給水訓練	20回
SFP給水訓練	12回
CSD訓練	4回

これまでの実施回数



○訓練の反映

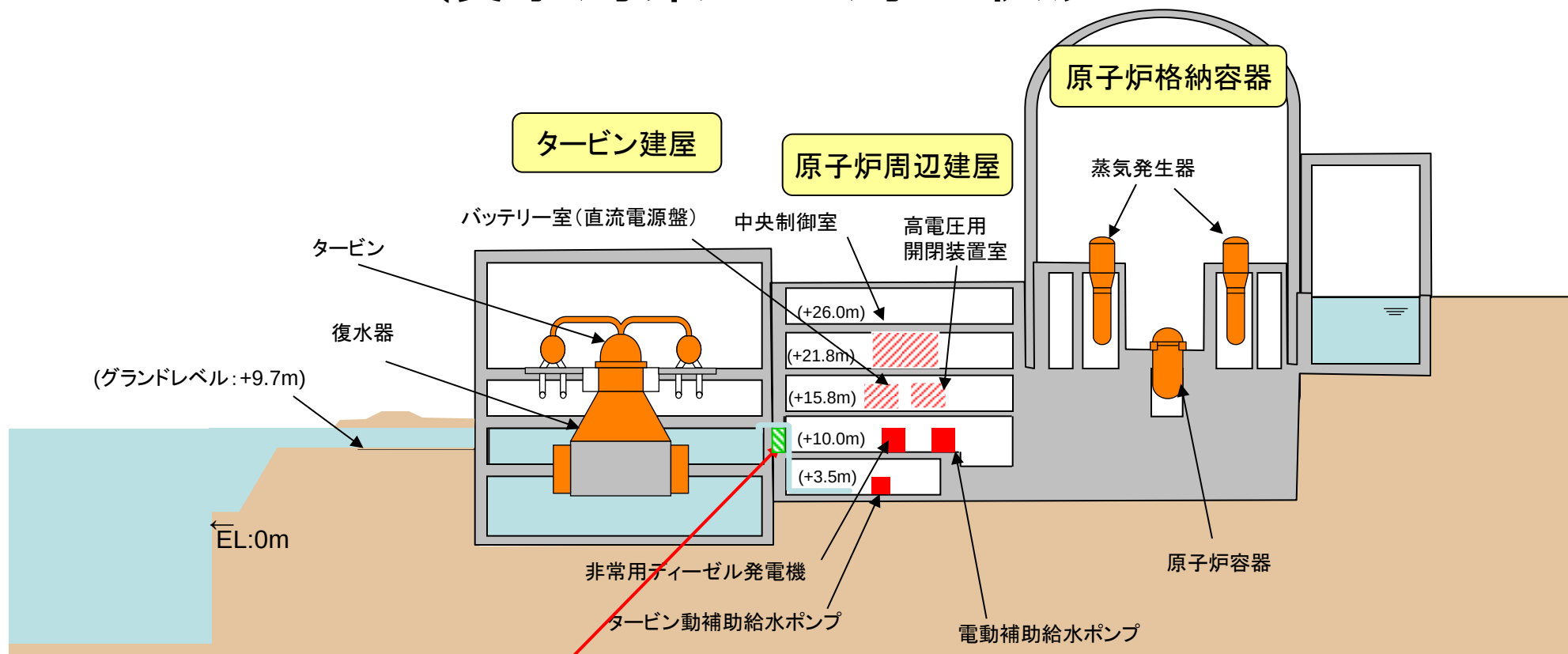
- ・ポンプ設置箇所へのマーキング
- ・連絡を密とするため無線機を配備 他

○資機材の予備

- ・消防ポンプ 必要台数53台／総数88台
- ・ホース 必要本数631本／総数670本

浸水対策への対応状況

5



津波から守るため浸水対策を実施

扉のシール

配管貫通部シール

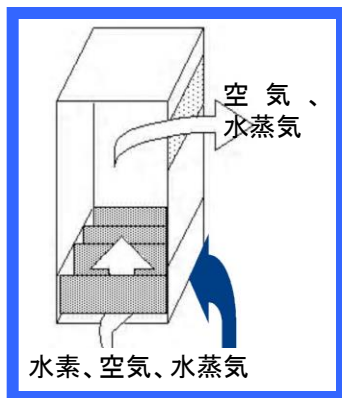
中央制御室に給電するために
必要な設備

(バッテリー室／高電圧用開閉装置室)

蒸気発生器に給水するために
必要な設備

(ポンプ室／高電圧用開閉装置室)

今後の更なる各種の対策

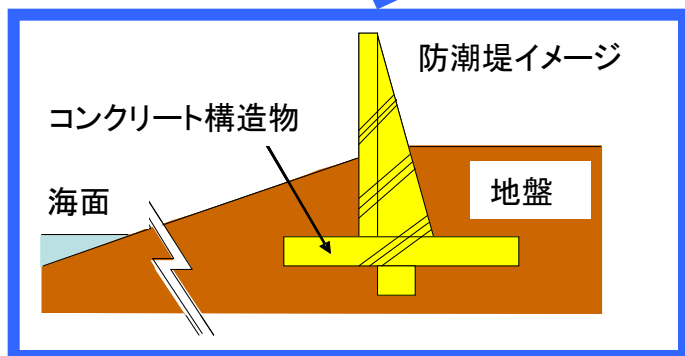


【水素爆発防止対策】

- ・静的触媒式水素再結合装置の設置（中長期）



【免震事務棟の新設】 （中長期で対応）



【防潮堤の設置】 （中長期で対応）

【発電所アクセス 道路の整備】 （中長期で対応）



【送電線の強化】 （建替など中長期で対応）

ストレステストにより、安全確保対策の有効性を定量的に評価していく。

【評価の視点】

- 福島を踏まえ、想定を超える事象を評価することで、プラント全体としてどの程度の安全裕度を有しているのか、プラントの脆弱性はどこなのかを認識する。
- 想定を超える事象に対する収束手段の多重性を確認し、それを確実にする。
- 緊急安全対策により多重防護の厚みを増し安全性向上に有効に寄与していることを示すとともに、今後の取り組みにより更なる信頼性の向上を図る。

【主な評価の項目】

- 地震: 想定を超える地震にどの程度まで燃料損傷せずに耐えられるか評価
- 津波: 想定を超える津波にどの程度の高さまで燃料損傷せずに耐えられるか評価
- 全交流電源および最終ヒートシンク喪失:
発電所が完全に停電(全交流電源喪失)および燃料から除熱するための海水を取水できない場合(最終ヒートシンク喪失)に、外部からの支援なしでどの程度まで燃料損傷せずに耐えられるか評価
- シビアアクシデントマネジメント:
これまでに整備してきたシビアアクシデントマネジメント策について、多重防護の観点からその効果を明示

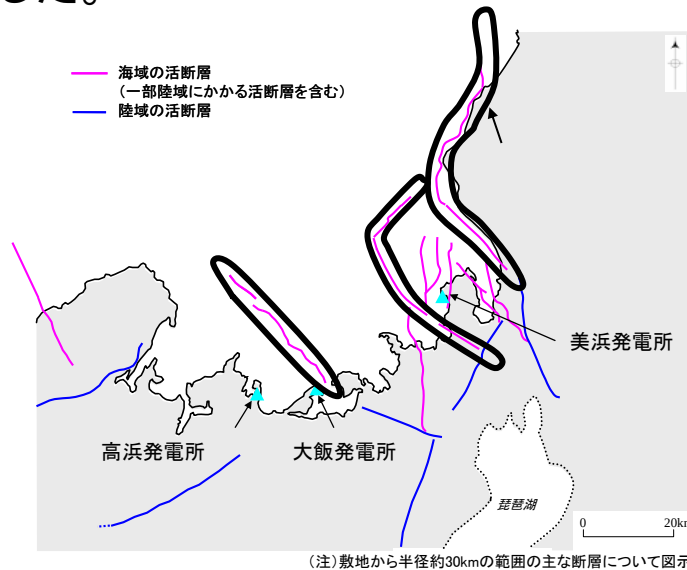
- ## 基準地震動Ss策定において 考慮した主な活断層



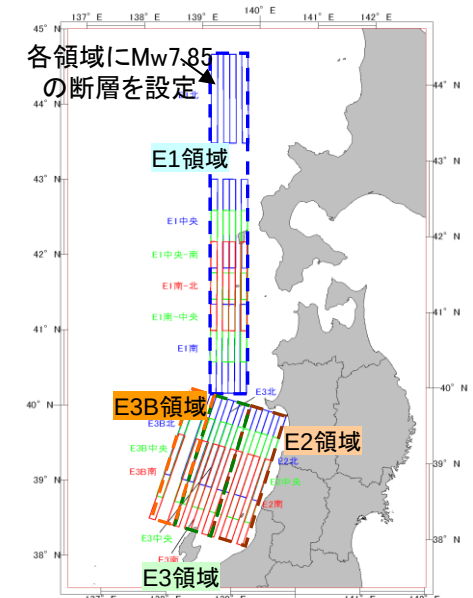
東北地方太平洋沖地震は、太平洋プレートと北アメリカプレートの境界域(日本海溝付近)における海溝型地震で、大規模な地震・津波が発生したが、若狭湾周辺に海溝型プレート境界はなく、発電所近傍の断層の同時活動を想定するなど、保守的な評価により基準地震動を考慮する。

津波に関する安全性について

- 評価の指標である想定津波高さ(2.85m)は、発電所付近の断層の同時活動の想定や日本海東縁部の断層までも考慮した保守的な条件で設定
- 安全確保対策を講じる以前では、想定津波高さ(2.85m)の約1.6倍(4.65m)までの津波高さに対して、最終的に海水へ熱を逃がすための冷却設備による冷却手段が利用可能であることを確認した。
- さらに、約1.6倍を超える津波高さに対しては、タービン動補助給水ポンプ室への浸水防止対策や空冷式非常用発電装置の高台への配備等により、約4倍(11.4m)の高さまで安全確保対策により整備した冷却手段(消防ポンプによる水源確保、空冷式非常用発電装置による電源確保等)が利用可能であることを確認した。
- 今後、建屋への浸水防止効果を維持していくため保守点検を確実に実施していく。
- なお、クリフエッジを超えた場合においても炉心冷却手段の多様化として、直接、蒸気発生器への海水や消火水の注入などの対応等を検討している。



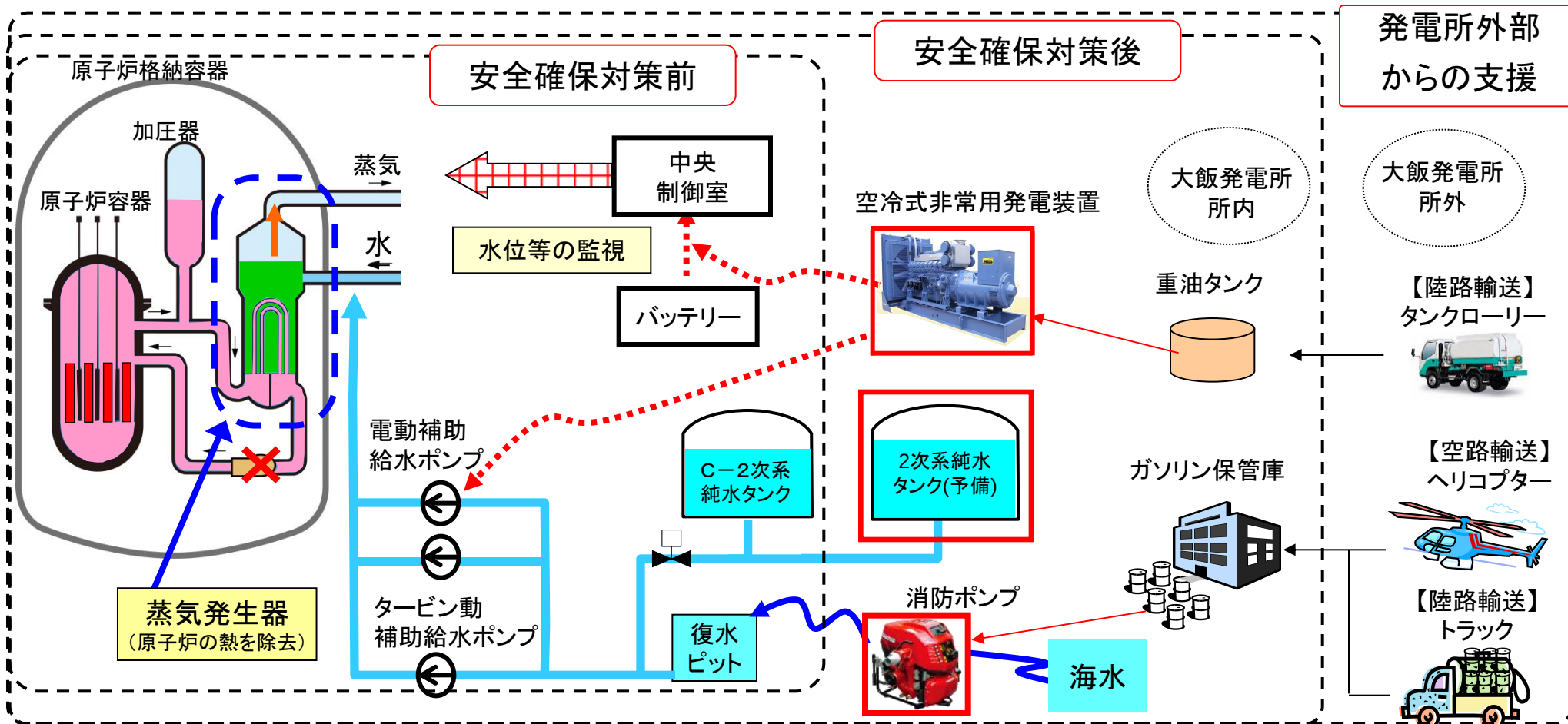
(注)敷地から半径約30kmの範囲の主な断層について図示



発電所近傍の断層の同時活動や日本海東縁部の断層までも考慮し、保守的な評価により想定津波高さを考慮する。

全交流電源および最終ヒートシンク喪失に 関する安全性について(原子炉の燃料)

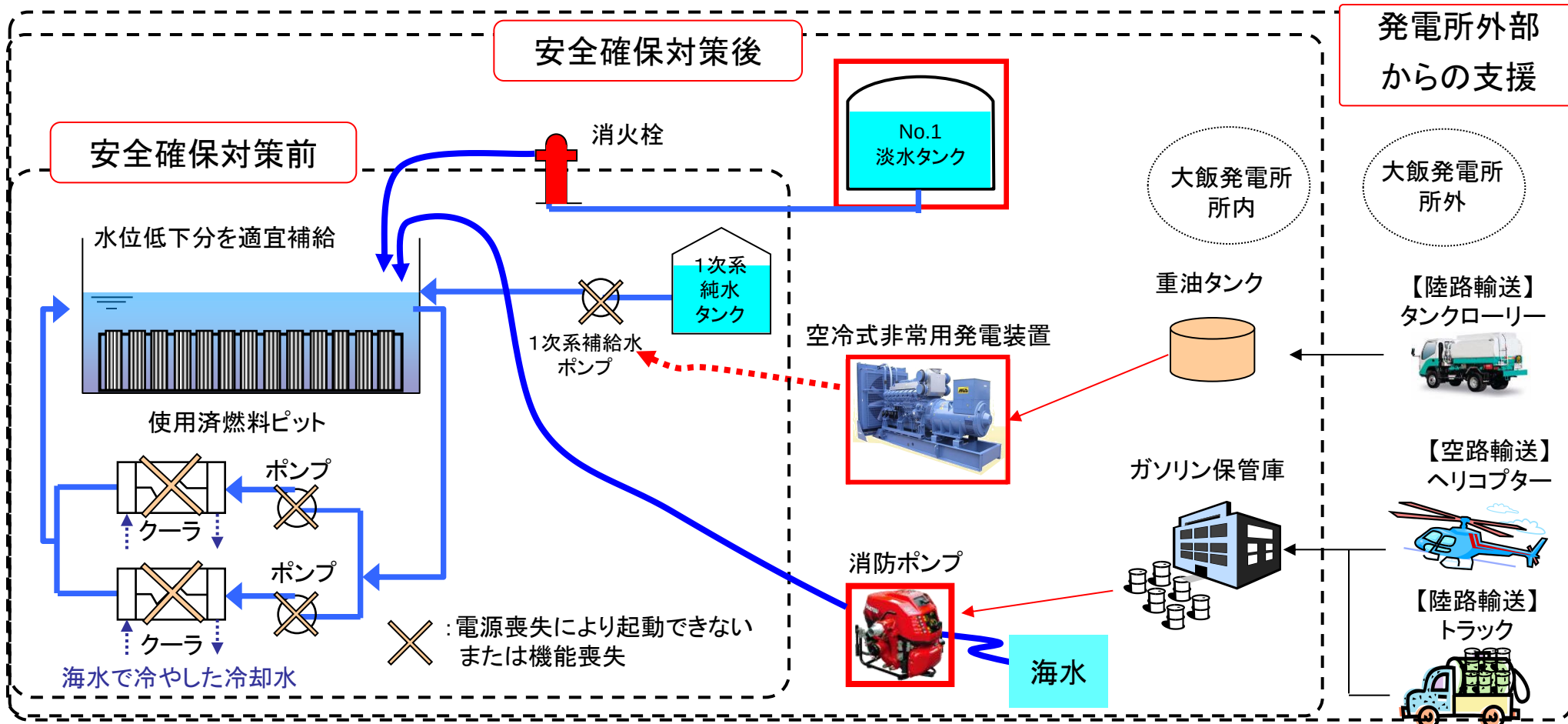
- 安全確保対策により、空冷式非常用発電装置を配備し、各種タンクからの給水や消防ポンプによる給水手段などを整備したことにより、**発電所外部からの支援なしで原子炉に約16日間給水を継続できる**こととなった。
- さらに消防ポンプ等に必要なガソリン等を外部から輸送することとしており、これら外部支援により長期間給水を継続できる。



全交流電源および最終ヒートシンク喪失に関する 安全性について(使用済燃料ピットの燃料)

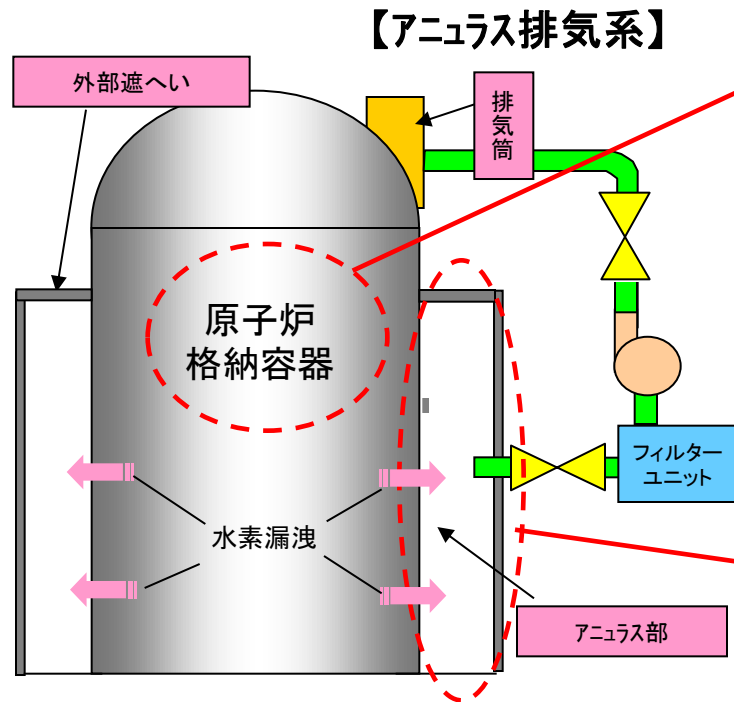
11

- 安全確保対策により、空冷式非常用発電装置を配備し、各種タンクからの給水や消防ポンプによる給水手段などを整備したことにより、**発電所外部からの支援なしで使用済燃料ピットに約10日間給水を継続できる**こととなった。
- さらに消防ポンプ等に必要なガソリン等を外部から輸送することとしており、これら外部支援により長期間給水を継続できる。



シビアアクシデントマネジメント

格納容器の特徴(水素爆発の防止)



【アニュラス排気系】

福島事故の知見

格納容器内

炉心損傷に伴い大量の水素が発生し、原子炉格納容器内に充満

原子炉建屋(格納容器外)

格納容器内に隣接する原子炉建屋に水素漏洩し、爆発

大飯3号機の場合

PWRの特徴として、格納容器の容量が大きく、水素濃度は爆発限界までの裕度大きい

アニュラス排気手順を整備し、水素の外部への排気を行う

アニュラス排気設備の運転に必要な電源は、配備済みの空冷式非常用発電装置から給電

容積: 約**72,900**m³(大飯3号機)

出力110万kWのBWR格納容器に比べ
約**5倍**の容量

一次評価結果概要(炉心に係る評価)

	クリフエッジ 評価の指標	クリフエッジ 下段:対象となる設備		緊急安全対策前 下段:対象となる設備	安全確保対策の 効果*1
地震 (津波との重畳も同じ)	基準地震動Ss (700gal)との比較	1.80倍(1260gal相当) 高電圧用開閉装置		1.75倍(1225gal相当) 原子炉補機冷却水ポンプ	約3%向上
津波 (地震との重畳も同じ)	想定津波高さ (2.85m)との比較	約4.0倍(11.4m) タービン動補助給水ポンプ		約1.6倍(4.65m) 海水ポンプ	約145%向上
全交流電源喪失 (SBO)	外部からの支援がない条件で、燃料の冷却手段が確保できなくなるまでの時間	炉心	約16日後*2 水源補給用消防ポンプガソリン	約5時間後*1 蓄電池	約76倍向上
		使用済燃料	約10日後(停止中)*2 ピット水補給用消防ポンプガソリン	約12時間後*1(停止中) (水温が100℃到達時点)	約20倍向上
最終ヒートシンク喪失 (LUHS)		炉心	約16日後*2 水源補給用消防ポンプガソリン	約6日後 蒸気発生器給水用水源	約2.6倍向上
		使用済燃料	約10日後(停止中)*2 ピット水補給用消防ポンプガソリン	約12時間後*1(停止中) (水温が100℃到達時点)	約20倍向上

* 1: 手順が整備されていない対策などについては、実行できる可能性があるものでも期待しないこととし、極めて保守的な条件で評価した。
* 2: 外部からの支援なしとした評価結果。外部からの支援を期待するに十分な時間余裕であり、クリフエッジは回避できる。

安全確保対策により、炉心の冷却手段が多重化され、
プラントの安全性が向上したことが確認できた

福島事故の概要とそれを踏まえた 大飯3号機での安全確保対策とその評価

福島事故の概要

地震発生(Ssの1.26倍)に伴い原子炉は自動停止。鉄塔の倒壊等により外部電源が喪失したが、非常用発電機が正常に機能し、原子炉の冷却に必要な機器は正常に動作

地震の後、想定の2.6倍(15.5m)の津波により、非常用ディーゼル発電機、海水ポンプ、分電盤等が被水

全交流電源喪失、最終ヒートシンク喪失が発生。その備えが十分でなかったことから事故が進展・拡大し、燃料損傷に至った

大飯3号機での安全性の確認・評価結果

安全確保対策整備前までの設備・対応等でも確実に燃料を冷却できることを確認。また、安全確保対策としての**空冷式非常用発電装置**や**消防ポンプ**などの配備、**手順書**の整備・**訓練**などにより、福島を超える事象に対しても確実な対応が可能なが確認できた(基準地震動Ssの1.8倍)

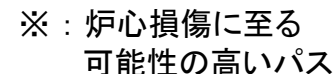
想定を超える津波高さにおいても、**空冷式非常用発電装置**や**消防ポンプ**の配備(手順書の整備を含む)、**扉や貫通部等のシール施工**により、福島を超える事象に対しても確実な対応が可能なが確認できた(想定4倍(11.4m)の津波)

全交流電源喪失ならびに最終ヒートシンク喪失時の電源として**空冷式非常用発電装置**の配備や、水源として各種タンクや**消防ポンプ**による給水手段などを整備したことにより、原子炉等の冷却が十分に可能であることが確認できた(発電所外部からの支援なしで、原子炉を約16日間、使用済燃料ピットを10日間冷却が可能)

まとめ

- 福島第一事故を受け、直ちに安全確保対策に取り組んでまいりました。
- これら安全確保対策の有効性を大飯3号機のストレステストの実施により、定量的に評価しました。
- その結果、福島第一事故のような燃料損傷に至る大事故を防ぐために、安全確保対策が有効であることを再確認いたしました。
- 加えて、ディーゼル駆動大容量ポンプ、海水ポンプモータの予備品化、防潮堤の設置、恒設非常用発電機の設置等安全確保対策の信頼性向上にも継続的に取り組んで参ります。
- 今後、事故原因の究明が進み、さらなる対策が明らかになれば、積極的に取り込んで参ります。

燃料を冷却するための イベントツリー



直流電源容量(約5時間)
がなくなった以降でも
冷却を維持するため

評価結果	クリフエッジ		緊急安全対策 の効果
	緊急安全対策後	緊急安全対策前	
燃料の冷却手段が確保できなくなる地震動と基準地震動Ss(700gal)との比較	約1.80倍(1260gal相当)	約1.75倍(1225gal相当)	約3%向上
対象となる機器	メタルクラッド開閉装置	原子炉補機冷却水ポンプ	

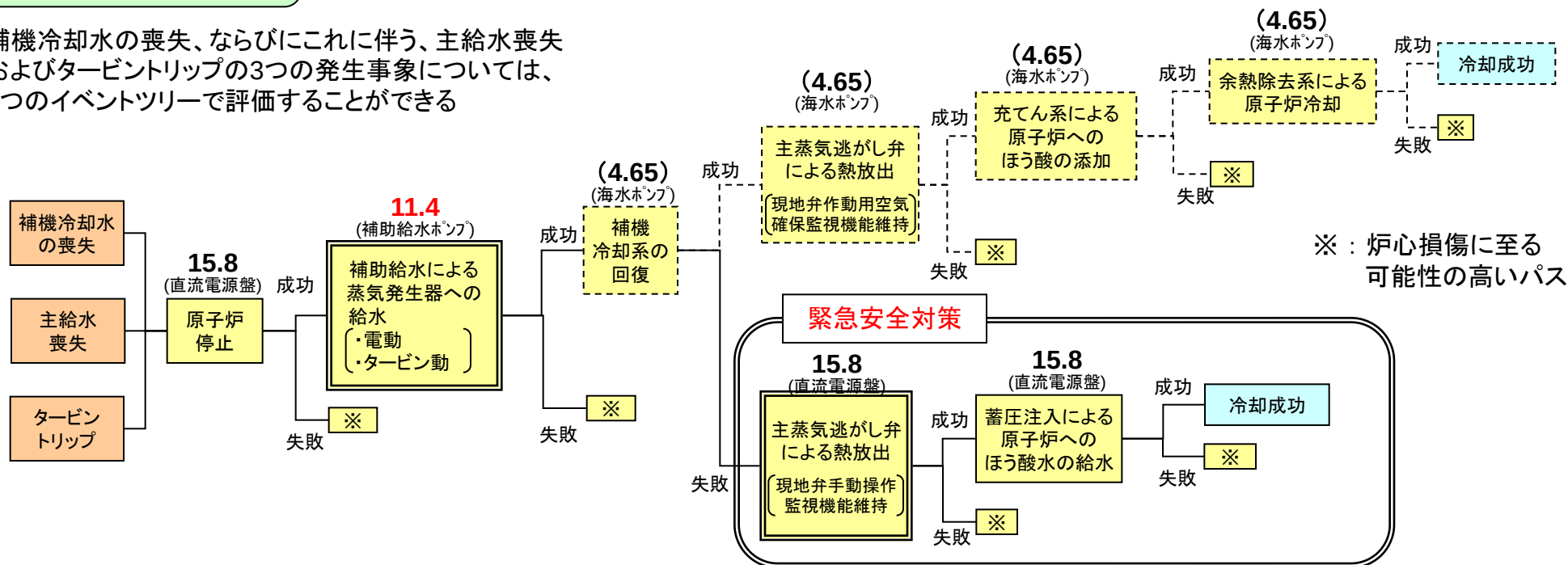
➡ 設計想定約1.8倍未満の地震が発生した場合であっても、炉心を冷却することが可能

津波の評価(原子炉運転中)

津波により補機冷却水喪失と主給水喪失等が同時に発生するとの想定で、燃料を冷却するために必要な機器が損傷することにより、冷却手段が確保できなくなる津波高さ(クリフエッジ)を特定する

燃料を冷却するための イベントツリー

補機冷却水の喪失、ならびにこれに伴う、主給水喪失
およびタービントリップの3つの発生事象については、
1つのイベントツリーで評価することができる



評価結果	クリフエッジ		緊急安全対策 の効果
	緊急安全対策後	緊急安全対策前	
燃料の冷却手段が確保できなくなる津波 高さと設計津波高さ(2.85m)との比較	約4倍(11.4m)	約1.6倍(4.65m)	約145%向上
対象となる機器	補助給水ポンプ	海水ポンプ	

➡ 設計想定約4倍未満の高さの津波が発生した場合であっても、炉心を冷却することが可能

全交流電源喪失の評価(原子炉運転中)

全交流電源喪失が発生するとの想定で、燃料を冷却するために必要な給水機能や電源機能が喪失することにより、外部からの支援なしで冷却が継続できなくなるまでの時間(クリフエッジ)を特定する

(炉 心)			全交流電源喪失発生からの時間(日数)																											
	水源	分類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	...	84	85	86							
SG 給水機能	復水ピット	イ)	←約5時間																											
	C-2次系純水タンク	ロ)	約6日間																											
	2次系純水タンク(予備)	ハ)	約10日間																											
	海水(消防ポンプ利用)※	ハ)																												
電源機能	蓄電池	イ)	←約5時間																											
	空冷式非常用発電装置 (補助ボイラ燃料タンク、非常用ディーゼル発電機燃料貯蔵タンク利用)	ニ)	約85日間																											

約5時間後
(緊急安全対策前)

約16日後
(緊急安全対策後)

※:消防ポンプはガソリンにより稼動。消防ポンプに期待する16日目以降においては、発電所備蓄ガソリンは他号機に使用して枯渇しており使用できない。

- イ) 工事計画で対象とした設備
- ロ) 実施済みのアクシデントマネジメント設備
- ハ) 緊急安全対策(短期)
- ニ) 設備強化対策(緊急安全対策に係る実施状況報告書にて計画されているもののうち設置済みの設備)

評価結果	クリフエッジ		緊急安全対策の効果
	緊急安全対策後	緊急安全対策前	
燃料の冷却手段が 確保できなくなるまでの時間	約16日後	約5時間後	約76倍向上
対象となる機器等	水源補給用消防ポンプガソリン	蓄電池、復水ピット水	

➡ 評価結果は外部から支援を期待するに十分な時間であり、また、ガソリン補給のためにヘリコプターによる空輸を行う仕組みも構築しており、クリフエッジは回避できる

最終ヒートシンク喪失の評価(原子炉運転中)

最終ヒートシンク喪失が発生するとの想定で、燃料を冷却するために必要な給水機能が喪失することにより、外部からの支援なしで冷却が継続できなくなるまでの時間(クリフエッジ)を特定する

(炉 心)			最終ヒートシンク喪失発生からの時間(日数)																							
	水源	分類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	...			
SG 給水機能	復水ピット	イ)	←約5時間																							
	C-2次系純水タンク	ロ)	約6日間																							
	2次系純水タンク(予備)	ハ)							約10日間																	
	海水(消防ポンプ利用)※	ハ)																								

約6日後
(緊急安全対策前)

約16日後
(緊急安全対策後)

※: 消防ポンプはガソリンにより稼動。消防ポンプに期待する16日目以降においては、発電所備蓄ガソリンは他号機に使用して枯渇しており使用できない。

- イ) 工事計画で対象とした設備
- ロ) 実施済みのアクシデントマネジメント設備
- ハ) 緊急安全対策(短期)

評価結果	クリフエッジ		緊急安全対策 の効果
	緊急安全対策後	緊急安全対策前	
燃料の冷却手段が 確保できなくなるまでの時間	約16日後	約6日後	約2.6倍向上
対象となる機器等	水源補給用消防ポンプガソリン	蒸気発生器給水用水源	

➡ 評価結果は外部から支援を期待するに十分な時間であり、また、ガソリン補給のためにヘリコプターによる空輸を行う仕組みも構築しており、クリフエッジは回避できる